
無幻灯

月停月夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無幻灯

【Nコード】

N7168W

【作者名】

月停月夜

【あらすじ】

この世に、幻の命などない。どの命も等しく輝き、消えていく。例えこの暗く淀んだ世界であったとしても。

マルガレーテが子爵邸で出会ったのは、銀色の髪にラピスラズリ色の瞳を持つ不思議な青年だった。次第に明かされていく青年の過去。渦巻くのは憎しみと哀しみ。

人々をつなぐ冷たい鎖は、マルガレーテを青年の残酷な過去へと引きずり込んでいく。

※※この小説は、未完成のまま連載中止とさせて頂いたましたが、拙作「暗闇男爵」の改訂版となります。内容そのものの変更はありません。そのため、所々本文が重複する箇所がございます。なにとぞご了承ください。※※

開店

夏の日差しが庭いっぱいに照りつける。ところ狭しと植えられた香草や薬草の類でハーブ畑の様を呈した小さな庭。風が吹くたびさわやかな香りがマルガレーテの鼻をくすぐった。

青々と茂る葉で隠された小道をかき分けて進み、赤茶けたレンガで分けられた一角にしゃがみこむ。他の花に比べて背丈も低く地味な花。けれどもリシスは宵闇の空に似た真っ青なその花弁を、天に向けて誇らしげに開いていた。星の形をしたその花をじっと見ていると、その内に秘められた闇に吸い込まれそうだった。

それはとてもきれいな闇だった。

この世界の悲しみや苦しみに淀む闇とは違う闇。むしろその闇を溶かし、鎮める穏やかな闇。

魔法を持つものと持たないものという、この世界を二分する深い谷はどこまでも暗く沈んでいる。その闇はこの世界に生きる、または死んでいった人々の心の淀みそのものだ。

マルガレーテは一昨日見た公開処刑の様子を、幾度も幾度も思い返していた。

処刑されたのはヴィルヘルムの若い男女五人だった。

ヴィルヘルムとは、昔この国で繁栄した魔法使いや魔法の直系の子孫が政府の監視下でひっそりと暮らす辺境の町だ。

魔法使いによって国が壊されかけ、魔法が禁止されてから八十年以上経った今となっては、歴史のかたに葬り去られている。

ヴィルヘルムを首都から隔てる二つの関所は、一つはキリーナ（涙）、もう一つはダルム（怒り）と呼ばれている。この関所を一般人は通ることができない。政府の役人であっても通行許可証がないと抜けることのできない、厳しく特別な関所なのだ。

その関所を五人は越えたらしい。

そして、政府の要人を殺した、らしい。

首に縄を掛けられた五人の立つ床が抜けたとき、処刑人は叫んだ。
悪魔の血よ、地獄へ帰れ！

五人は顔を歪め、棒きれのようにやせ細った体を頼りなく空に揺らしていた。

その瞳は絶望し、悲しみに満ちていた。

果たしてあの脚で関所を越え、あの腕で人を殺せるのだろうか。
彼らが悪魔なら、私たちはいったい。

「……はあ」

マルガレーテは心の靄を吐き出すようにため息をついた。

リススの花卉は風に揺れる。朝にとどまる夜の闇は、今もそこにある。マルガレーテはそっと闇にふれた。少しだけ、哀しみが溶けた。

けれども、この小さな花の闇色は、マルガレーテの心を癒せても、この世界を包み込むことはできないだろう。

マルガレーテは地面に置いたジョウロを持ちあげ、根元に口の先を差し込むようにしてちよろちよろと水をやった。水は、すぐに土にしみこんで消えた。

考えてもらちがあかない。

気持ちを切り替えようと頭をふって、ジョウロを手にしちあがつた。ガサガサと音を立てながら小道を戻り、家の壁に立てかけた柵にジョウロをのせる。柵にもった土ぼこりがブリキのジョウロに擦れてガリリと音をたてた。

「マルガレーテ！ 店番頼むわよ！」

裏口の扉の向こうから、忙しげな母の声が飛んだ。

「はい！」

腹に力を込めて返事をし、マルガレーテは扉に手をかけた。

風が踊る。さわさわと葉擦れの音がマルガレーテを引きとめた。
ちらりと振り返れば、眩しい金色の朝日に包まれて、小さな庭はきらきらと輝いた。

きれいだ。マルガレーテは目を細めて笑い、再び小道をかけた。

手を伸ばしてリシスを二輪摘み取る。

「今日はお前を飾ろうね」

穏やかな夜がこの国に訪れますように。

リシスに祈りながら歩き、裏口の戸をきい、と開ける。とたん、ふわり、甘く青臭い香りに包まれる。花屋にしかない独特の香り。薄暗い店内には、花々の詰まった桶がたくさん置いてある。天井から、ツタの植えられたかごが吊るされている。風の吹きこまない部屋の花々は、薄暗闇の中まだ眠っているように見えた。

一歩あるく度に床が鈍い音を立てて軋む。壁のフックに引っかけられた鋏を取ってリシスの茎を斜めに切り落とし、カウンターを横切って、隣の部屋に通じる扉を開けた。そのまま肩で扉を抑えつけ、足でストッパーを押しこんだ。

昔は住居の玄関だったこの部屋は、東向きの大きな窓から朝日が注ぎ込み、店とは比べ物にならないほど明るい。

マルガレーテは扉の目の前に現れた狭い階段をよけ、二つだけ置かれた丸テーブルの上のガラスの水差しにリシスを差した。すぐに、階段下のキッチンに置かれたポットを手に取り、蛇口を捻って水を注ぐ。

こちゃこちゃとガラスを打つ水音が心地よい。

マルガレーテと母はこの部屋を、お茶の部屋、と呼んでいた。カフェというにはあまりにこじんまりしているし、ここで商売をするつもりはないからだ。ここはただ、趣味で育てたハーブをお客さんに楽しんでもらうためだけの部屋。常連さんしかここには通さないため、テーブルは二つ、椅子は四脚で十分だった。

水が通ってひんやりとした蛇口を閉め、テーブルに戻って水差しに水を注いだ。

「それじゃあ、お店開けますか」

母は花を仕入に市場へ向かい、しばらく帰って来ない。それまで店を切り盛るのはマルガレーテの仕事だ。

店に戻ると表札を裏返し、両開きの扉を開け放つ。そのとたん、

風が舞い込んだ。店の空気が変わる。花たちが目覚めた。

「おはよう」

声をかけて花桶を持ち上げる。手のひらほどもある大きな赤いラシーヌはゆらり、心許なく揺れた。

たっぷりの水が入った花桶はずしりと重い。体を仰け反らせるようにして桶を作業台横の流しに運ぶ。花を桶から出して、中の水を勢い良く流した。

水はタイルに跳ね返って飛沫を上げる。マルガレーテの腕にもたくさんの滴が垂れた。

夏は良い。水に触れることの多いこの仕事は夏に向いている。水は重い桶を運んで暑くなった体を冷やしてくれる。

マルガレーテは蛇口を捻り、空になった桶に水を入れた。

地下から汲み上げられた冷たい水。まだ波紋の広がる水面にラシーヌの花を差し入れた。

「よいしょ」

掛け声をかけて桶を再び持ち上げる。花桶を元の場所に戻すと今度はナラマの花桶を持ち上げた。ころころした白いラナマの花が幾つも顔に擦れてくすぐったい。

マルガレーテは眉間に軽く皺を寄せ、僅かに顔を上向けて花を避けるとこれも流しに運んだ。

水換えは大切な仕事だ。これを怠れば花が死んでしまう。

けれど十数個ある花桶全ての水換えを一人でこなすのは、なかなか辛い。

ようやく水換えを終えても、次は苗の世話がある。

マルガレーテは水換えを終えた最後の花桶を床に戻し、ぐい、と伸びをした。

パキパキ、と背骨が鳴るのを感じた。体が幾らかすっきりする。

後は苗の手入れだけだ。

鉢を再び手にして店の表にしゃがみこんだ。

暑い日差しを背にして黙々と苗を整えていると、蹄が石畳を打つ

軽快な音が聞こえてきた。

母が帰ってきたのだろうか。マルガレーテは立ち上がり、通りの向こう目をやった。黒塗りの馬車。店の荷馬車ではない。

「誰の馬車かしら」

馬車を引く二頭の青毛の馬は人々を脇に下がらせながら段々と近付いてきた。

朝も早いこの時間は開いている店などほとんどないのに、馬車が通るなど珍しい。

街の外へ行くつもりなら一つ向こうの馬車道を通ればいいのだ。パカパカと蹄の音は一際高く鋭くマルガレーテの耳を打った。

目の前を過ぎると思ったその時、御者が手綱を絞り、馬が歩みを緩めた。馬はぶると鼻先を震わせる。馬車は思いがけずマルガレーテの店の目の前で止まった。

「え？」

マルガレーテは思わず眉を寄せた。馬車の横腹にはラシーヌの花の紋章。政府の馬車だった。

一体何の用だろう。何か悪いことでもしたのだろうか。……いや、何もした覚えはない。

訳もなく不安になって首を傾げていると御者が降りてきて扉に手をかけた。

誰がおりてくるのだろうか。じっと扉が開くのを見守っていると、馬車から中折れ帽を被った青年が出てきた。

「あ」

見知った人物の登場にマルガレーテはほっと胸を撫で下ろした。茶色い瞳に無邪気な光を宿して青年は笑う。

「やあ、マルガレーテ。愛しきわが妹よ」

「伯爵様、冗談は止めてください。」

「冗談などではないよ。私の妹の親友は私の妹も同然さ」

伯爵は態とらしく真面目そうな顔をして頷き、すぐに相好を崩した。

伯爵の名はリアヌ・フォン・カストラル。彼の言う妹のアリアは実のところ伯爵の妹ではなく姪であり、マルガレーテの初等学校以来の親友である。

もちろんマルガレーテは貴族の娘などではない。だからと言って身分を超えた友情を築いたわけでもない。

リアヌは伯爵の位を受けるほどの家柄の出であるが、アリアは中流階級の家の娘なのである。伯爵の姉であるアリアの母が中流階級の家に自ら望んで嫁いだのだ。姪と言っても身分は伯爵よりもずっと下。互いを兄、妹と呼ぶほど仲睦まじい二人に嫌悪の目を向ける貴族も多い。しかし二人はそんな差別的なまなざしを気にすることはない。マルガレーテはいつでも嬉しそうに互いのことを話す二人が好きだった。

「それで、伯爵様。今日はどのようなご用件で？ 式の装飾のことですか？」

式、という言葉が出た途端、伯爵のいつものいたずらっぽい笑みがなりを潜めた。実はアリアは‘兄’の手を離れて来月の頭に結婚するのだ。

少し寂しげに伯爵は微笑んだ。彼の瞳が揺れたのをマルガレーテは見逃さなかった。

「ん？ あ、ああ……、飾り付けはこの間お願いした通りで頼むよ。最近あの子はすっかり浮かれてしまっただね。もう少し落ち着いてほしいものだよ」

アリアに落ち着いてほしい、と言いながら、さる言う伯爵もそわそわと落ち着かない。

マルガレーテはえくぼを作ってふふっと笑い声をたてた。

「仕方がないですよ。好きな人との結婚が決まって落ち着いてなんていられませんもの」

「ふむ。確かにね。しかし、まあ。私は彼のためにも、アリアにはもう少ししっかりしてほしいのだよ。結婚する前からあの調子では……」

伯爵の顔が曇った。これから結婚するアリアのことが心配なのだろう。

「それにもし、あの子の今の様子を見て相手が結婚を拒否するなんてことになったらどうする？ それこそ、それこそあの子は立ち直れなくなる。それにそれから相手を探すといったって」

「大丈夫ですよ。お相手のフィルマー男爵はとても優しい方なのでしょう？」

「ああ、だが」

「それより、立ち話もあれですから良かったら中へどうぞ」

マルガレーテは伯爵の話を無理やり断ち切った。伯爵はぴくりと顔をこわばらせ、ぐっと言葉をつまらせる。

「……そうさせてもらおうかな」

ため息を吐き出すように伯爵は答えた。元気をなくした伯爵を見て、式の話を出さなければよかったと後悔しながらマルガレーテは伯爵を店内に招いた。

彼の用件は結局分からないままだったが、何も言わなければこのまま暑い路上で妹思いの兄のおしゃべりが延々と続きそうだった。

朝とはいえ、太陽の下黒のスーツ姿の伯爵の額にはじんわりと汗が浮いている。

伯爵はこの店の常連、すなわちお茶の部屋のお客様だ。陽に当てられて倒れてしまわないうちに休んでもらおう。

今日はミントティーにしようか、お砂糖は多めに入れようか、冷たい方がいいだろう。体が冷えるように。

庭のハーブを思い浮かべながらお茶の部屋に続く扉に手をかける。

「しまった、シャルア！」

マルガレーテは伯爵の大声に飛び上がった。

ぱっと伯爵の方に視線をやると、伯爵が馬車に駆け戻っていくところだった。

出会い

馬車の脇に控えていた御者が伯爵を見て馬車の扉に手を伸ばす。しかし、御者がが開けるのを待たずに、扉は内側から開いた。

青年が戸口に身を屈めて立っている。プラチナブロンドが吹いてきた風にそよ、と靡いた。

「このままおいて行かれるのかと思いました」

青年は伯爵を責めるでもなく穏やかな声音で言った。

「いや、すまないシャルア！」

後ろ姿だけでも焦りが伝わってくる伯爵に、青年は微笑む。

「気にしないでください」

応えながらシャルアと呼ばれた青年が馬車を降りる。年はマルガレーテよりも少し上、二十四、五だろうか。真っ赤な軍服が眩しかった。

「ここですか？」

シャルアは伯爵を通り越してマルガレーテの店に目をやった。とたん、不思議そうに薄い眉が寄せられたが、それはほんの一瞬のことでシャルアはすぐに笑顔に戻った。

「ああ、花を買われてからいくのですね」

シャルアは自分の出した答えに納得したようで、一応確かめるというように伯爵に尋ねた。

「ふふん、何でそう思う？」

伯爵は得意気だ。

伯爵が何をしに来たのか聞きそびれたマルガレーテには彼の真意を知りようもない。くいと首を傾げていると、シャルアも気持ちとは同じだったようで今度はしっかり眉間に皺を寄せた。

「伯爵の妹君のところに花茶をしにいくと言っていらっしゃったので」

声のトーンが下がっている。

「そうさ、だからここだよ」

「は？」

「店の奥にいるのが私の妹さ」

「もう一人いたのですか？」

「まあね」

「けれどここはどう見ても花屋では」

「いいから入るぞ」

言いながら、伯爵はシャルアの腕をがっしりと掴む。シャルアを置き去りにしかけた罪悪感などすっかり吹き飛ばしたようで、マルガレーテ以上に強引にシャルアを店に連れ込んだ。

店の中程まで来て、伯爵は引っ張ってきたシャルアの体突然をぐいと前へ押しやる。

「あ」

マルガレーテは驚いてシャルアに手を伸ばし、同時に伯爵に非難の目を向けた。

シャルアはバランスを崩してとっととステップを踏む。

しかしマルガレーテの心配は杞憂に終わり、彼は彼女の腕が届く前に体制を立て直した。

水色の瞳がマルガレーテを捉える。

近くでみて、初めてシャルアの瞳が薄い水色をしているのが分かった。

太陽の下ではきつと水面のようにきらきらと輝くのだろう。しかし、今は困惑の色一色に塗り固められている。

マルガレーテと目が合うとシャルアの瞳は彼女の正体を見定めようとするかのようにせわしなく動いた。そしてはっと我に返ったように姿勢を正した。

「失礼いたしました」

今までのことが嘘のように、シャルアは優雅に腰を折った。どきり、自分の心臓が跳ねたのがマルガレーテには分かった。

「い、いえ、初めまして」

慌ててとにかく礼儀をつくそうとマルガレーテはワンピースの裾を持ち上げて腰を落とした。

顔を上げたシャルアは、にこり、微笑む。

マルガレーテは、今度は頬を火照らせた。

「こちらこそ初めまして。私はシャルア・ラナ・プロミシエルと申します。以後お見知りおきを」

「わ、たしは、マルガレーテ・ウィルキンスと申します」

「ウィルキンスさん。……素敵なお店ですね」

シャルアは店を見回すと優しい微笑みを浮かべて言った。身分も高くないマルガレーテに対して、少しも嫌みを感じられなかった。

けれど、彼の洗練された身のこなしは、見間違えようもなく上流貴族のもの。シャルア・ラナ・プロミシエル。名前を頭の中で反芻する。何となく聞き覚えがあるような気がした。けれどすぐには思いつけず、マルガレーテはそのことを気取られぬように表情を作つて礼を述べた。

「ありがとうございます。ここは母のお店で、私はその手伝いをしているんです」

「そうだったんですか」

言葉とは裏腹に、シャルアには少しも驚いた様子がなかった。やはり店を持つようには見えないかと、マルガレーテは内心肩を落とした。

「ええ。私はまだまだです。それより、奥へどうぞ。ハーブティーをお入れます」

目だけを動かして店内をきろきろと見回していたシャルアは、マルガレーテの言葉を聞いて、ああ、と呟いた。

「お茶をする、とはそういうことだったんですね」

「はい。全ての方をお通しするわけでもないのですが、庭で取れたハーブのお茶をお出ししています」

「そのお茶がまた美味しいんだよ」

いつの間にか伯爵はシャルアの横をすり抜けてマルガレーテの横

に立ち、初めからそこにいたような顔をして話に割り込んできた。
マルガレーテが訝しんで伯爵を見上げると、伯爵は顔を動かさずにちらりとマルガレーテを見おろした。その口の端がほんの僅かに上がった。

「ハーブティーのハーブはね、彼女が自分で育てているんだよ。ざっと二十種類くらいだったかな？」

伯爵の問いかけにマルガレーテは頷いた。伯爵は、何か不自然だ。嫌な予感がする。

伯爵のそんな様子には全く気づかないのか、シャルアは今度こそ本当に驚いたように目を見開いて素直に感嘆の言葉を口にした。

「二十種類もご自分で？ それはすごい」

「いえ」

「そうだろう？」

またもや伯爵はマルガレーテの話を遮った。マルガレーテが睨むように鋭く伯爵を見上げると、シャルアに向けられた伯爵の瞳は目に見えて良からぬ色を宿していた。

「君のお相手には素晴らしい女性だと思うが」

「……ええ!？」

一瞬の思考の停止の後、マルガレーテは思わず声を上げた。

お相手、という言葉が差す意味を考え、真っ先に行きついた答えに赤面する。何よりもその答えを一番導き出した自分が恥ずかしかった。

そんなマルガレーテを気にもせず、シャルアは難しい顔をしたまま黙っている。薄い水色の湖面にしっかりと伯爵の姿を映して。

店はしん、となった。花たちまで、声なき声を押し殺しているようだった。

マルガレーテは羞恥に俯き、手を握りしめた。

「そんなことを言っでは、ウィルキンスさんに失礼ですよ」

シャルアは言葉を慎重に、吟味しながら口に行っているようだった。ゆっくりとした口調で、落ち着き払ったように聞こえるが、彼の顔

に笑みはない。

シャルアが本当は何を考えているのかを思うと、マルガレーテは苦しくなった。マルガレーテが言ったわけでもないのだが、身分の格差は責任がのしかかる対象をも変えてしまう。少なくともマルガレーテ自身はそう思い、身を縮こまらせた。

「ふむ。そういう君の言い草の方が失礼だと思うがね」

にやにや笑いを隠そうともせず、伯爵が上げ足をとる。

「私はまだ身を固める気はありません」

「なぜ」

「それは……」

「今のままがいいか」

シャルアが言葉に詰まった。水色の瞳をわずかに細め、探るように伯爵を見つめている。だが伯爵はシャルアの様子がおかしいことに気付いた風もなく話し続けた。

「まあ、独り者は気楽だからな。はは、そういう風に思う気持ちもわからないでもないが」

「……………」

「うむ。だが、結婚はいいものだよ。孤独ではなくなるわけだからね。……シャルア？」

笑いながら続けようとして、違和感を覚えたのか伯爵はふっと黙ってまじまじとシャルアを見つめ返した。

すると、シャルアはすぐさま視線をそらした。

一段と空気が張り詰める。マルガレーテは動くに動けず、ごくりと唾を飲み込んだ。

「……まさか」

伯爵が唸った。

「あの、弟のせいかな？」

声音に苛立ちが混ざっている。

シャルアはきゅっと口を引き結んだ。

まずい。マルガレーテは素早く二人を見比べた。けれど、張り詰

めた空気には、事情も知らないマルガレーテが入り込む余地はやはりない。

「そうか。確かに君は今一人ではなかったな。だがそれが理由なら、尚更早く結婚をすべきだ。あれも、兄の新婚生活の邪魔まではしないだろう」

「違います！ あの子は何も関係ない」

「じゃあ何故答えられなかった？」

「失礼ながら、伯爵がまたあの子の批判をなさるのかと思ひまして」
結局そうなってしまうましたが、とシャルアは苦虫を噛み潰したような顔で続けた。

伯爵の表情が一段と険しくなる。

何か言わなくては。マルガレーテは自分を奮い立たせるためな一歩前に踏み出し、口を開いた。

「あら、いらっしやいませ」

底抜けに明るい声が、暗い店内に響いた。

伯爵とシャルアは一瞬で厳しい表情を封じ込めて声のした方に向いた。

マルガレーテがはっとして口を閉じ入口を見ると、母が店に入ってくる場所だった。店表には荷馬車が止まっている。どうやら緊張で蹄の音も聞こえなかったようだ。

「お暑い中、ありがとうございます」

言いながら、母はマルガレーテに目配せする。マルガレーテは、ほっと肩の力を抜いた。

「伯爵様、子爵様、よろしければ奥へどうぞ」

子爵？ 母の言葉にぎょっとしてマルガレーテはシャルアを見た。
シャルア・ラナ・プロミシエル。プロミシエル……。プロミシエル、子爵。

青ざめた。目の間にいる彼がこのあたりを治める領主だと今更に気がついて、マルガレーテは身を強ばらせた。子爵がこんなに若いとは思わなかった。だから、名前を聞いても気づかなかったのだ。

子爵を見つめたまま固まって自分に言い訳をするマルガレーテの名を、たしなめるように母が呼んだ。

「マルガレーテ、扉を開けて頂戴」

「は、はい」

マルガレーテはノブに飛びつくようにして扉を開けた。

「ありがとう」

伯爵がマルガレーテに声をかけて部屋に入る。すれ違い様、伯爵はマルガレーテの肩に手を置いて、すまなかったと囁いた。気まずそうに笑う彼は、もういつもの伯爵だった。いえ、と首を横に振りながら、伯爵にももう少し落ち着いてほしい、と思った。

伯爵に子爵が続く。マルガレーテには、彼に対しての方がよほど気まずかった。いつもより早く打つ鼓動を悟られまいと口を引き結んで頭を下げる。早く行き過ぎてほしいと思っていたのだが、シャルアの脚はマルガレーテの前でぴたりと止まった。心臓がきゅつと音を立てた気がした。

僅かな沈黙。マルガレーテがそろりと上目遣いで様子を窺うと、シャルアもまた居心地悪そうに立っていた。

「ウィルキンスさん」

「はい」

呼び掛けられて、思わず折り目正しく返事をする。

「ご無礼を、お許しください」

「……………」

とうとう、声すら出てこなかった。

シャルアは、ずっと頭を下げると、そのまま部屋に消えた。

「マルガレーテ」

ぽかんとして子爵の後ろ姿を見送っていると、ぽんぽん、と肩を叩かれた。

「とりあえずお茶を淹れてちょうだい」

「……はい」

心配そうな母の視線を感じながら、マルガレーテはお茶の部屋に

入
っ
た。
。

お茶の部屋

伯爵と子爵は、既に席に着いている。先ほどの一幕などなかったかのように談笑する二人にマルガレーテは面食らった。そこに、母が入ってきて改めて挨拶をし、注文をとる。置いてきぼりにされているのはマルガレーテだけのようなうだ。蛇口を捻って爪の間まで手を洗いながら、マルガレーテは少しむくれた。

母は子爵のことを知っていた。ということは、子爵の事情もマルガレーテよりはわかつているのかもしれない。子爵に弟がいるなど、聞いたこともなかった。そもそもマルガレーテは子爵の歳すら知らなかったのだが。それでも、領主の弟ともなれば、話題にのぼりそうなものではないか。それが若い女性たちの間の会話ともなれば尚更。

しかし、そうだ。会話に子爵の弟の話がのぼる、のぼらない以前にマルガレーテは全くそのような話に興味を持っていなかった。そのことを思い出して、マルガレーテは自分が知らないのも尤もか、と嘆息した。自分に呆れて、ため息をついた。

「マルガレーテ、ミントティーをお出しして。温かいものよ」
注文を取り終えた母が指示する。

アイスティーじゃなくていいのか。こんなに暑いのに。符に落ちないものを感じながらはーい、と生返事をするとかんを火にかけて、部屋を出た。

ミントを摘んでこなければいけない。

お茶の部屋の扉を後ろ手に閉めても、伯爵の笑い声が聞こえてきた。

子爵も気の長いものだ。伯爵の気まぐれに日がな一日付き合わされたらたまったものではない。庭へ出てきちんと扉を閉めてから、悪い人ではないのだけれどね、と呟いた。

ミントをつみ、ふと思いついてレモングラスも刈り取った。ハー

ブの切り口から、一段と強く爽やかな香りが漂う。その空気をいっぱい吸い込めば、香りは鼻を、肺を冷たく冷やした。

「いい匂い」

ミントとレモンガラスの相性は抜群で夏にはこれに勝るお茶はないとマルガレーテは思っていた。これを気に入ってくれば、子爵もお茶のお客様になるかもしれない。

「そうしたら、さっきの話の弟さんのことも何か分かるかも」

けれど。マルガレーテは鋏を動かす手をとめた。最初の笑顔からは想像のつかないような、警戒心をむき出しにしたあの表情が頭をよぎる。少しばかり彼に近づくことができたとしても話してはくれないかもしれない。

「はあ」

子爵にあんな顔をさせるようなことだからこそ、知りたいと思うのだが。

「子爵様のこと、あとでお母さんに聞いてみようかしら」

マルガレーテは春の日だまりのような子爵の笑みを思い浮かべた。あんな笑顔を浮かべる男性に今まであったことがなかった。細められた水色の瞳は本当に澄んだ水そのものの色だった。とても、とてもきれいな色だった。

心臓がぎゅっとつかまれたように痛む。

……これは？

湧き上がる感情を意識するほどに頬の熱が高くなった。マルガレーテは頭を過ぎった推測をかぶりを振って打ち消した。

「と、とにかく子爵様に美味しいお茶を飲んで休んでもらわなくちゃ」

伯爵の姿はすっかり子爵の影に隠れていた。

マルガレーテはしゃきり、もう一つかみレモンガラスの葉を切り落とすと、庭にくると背を向けて小走りで店に戻った。

鋏を壁にかけなおし、ハーブを片腕に抱いて少しだけお茶の部屋の扉を開ける。聞こえてくる子爵と伯爵の声が大きくなる。もう少

し扉を大きく開き、子爵の後ろ姿を盗み見た。子爵は時折伯爵に頷きを返しながら穏やかに話している。二人はマルガレーテの動きに気付いていないようで、特に変わった様子もなく話を続けた。

マルガレーテはそつと二人から目をそらして何事もなかったかのように部屋に入った。そうしながらも耳はしっかり二人の会話に傾ける。

「しかし、アリアが結婚とはなあ。本当に信じられない」

伯爵がため息混じりに呟く。

「ええ、けれどおめでたいではないですか。伯爵のお気持ちもお察ししますが」

「いや、お前には分からない。分からないさ、私の気持ちは。誰にもわからないね」

子爵の苦笑交じりの表情が目には浮かぶようだった。伯爵も、今だけでもこの話は控えればいいのに。先程は結婚という話しからあれほど剣呑な雰囲気になったのだから。

「ああ、愛しい妹が私の手を離れていってしまうなんて！」
伯爵が大げさに叫ぶ。

……アリアのことが大切に仕方がないのはわかるのだが。

二人に背を向けて台所に立ち、ハーブを粗刻みしながらマルガレーテは洗面を作った。その横に、空になった皿を持って母がやってくる。母はすぐ横にいるマルガレーテにしか分からないほど僅かに肩をすくめてみせた。

まさか、ずっとこの話題なのだろうか。あまりに子爵が気の毒だ。ティーポットに刻んだミントとレモングラスを入れ、薬缶に手を伸ばす傍らテーブルに目をやる。そこにはたじたじとして苦笑を浮かべる子爵がいる。またもや伯爵はその場の空気をすっかり無視して話し続け、すでにお茶の部屋は彼の独壇場と化しているようだった。

まったく。

怒りのような、呆れのような複雑な気持ちが湧いてくる。

いらいらとする気持ちの反面ハーブはなかなか煮出されない。ついにはアリアが幼いころの思い出話まで持ち出したところ、ようやくハーブティーが出来上がった。そのころにはむずむずする気持ちももう限界で、マルガレーテはレモンを引っ付かんでざくりと半分に切り、二つのカップにさっとお茶を注ぐとレモンをぎゅっと絞った。カップを盆にのせてテーブルに運び、マルガレーテはきつい視線を伯爵にずっと注ぎ続けたが、それにさえ伯爵は気付かない。気づいていない振りをしているのではないかという疑念さえよぎる。シャルアはすぐに怖い顔をするマルガレーテに気が付いてぎよつとした顔をしたのだが、生憎マルガレーテは彼に気付かなかった。

「失礼いたします。どうぞ、伯爵様」

棘の混じる言葉。わざと伯爵の視界をさえぎるようにカップを置く。

「子爵様もどうぞお召し上がりください」

シャルアには丁寧な言葉をかけ、すっと退き頭を下げる。

あれだけ滑らかだった伯爵の舌が動きを止めた。幾度も瞬きしながらマルガレーテの顔を眺めて、何が起きているのか分からないという様子だ。お辞儀をしたまま、マルガレーテは心の中でしてやったり、とほくそ笑んだ。

「そりゃあないだろう」

やっと事態を理解したようで、伯爵が気の抜けた声で言う。くすり、シャルアが声を立てて笑った。

「仲がよろしいですね」

バリトンの声が胸にしみる。シャルアの声を聞いて、マルガレーテははっと我に返った。

「あ……。申し訳ございません！ つい……」

マルガレーテは自分の言動を振り返って青ざめた。つい、いつもの調子に戻ってしまった。ぼろがでるとはこういうことを言うのだろう。

「伯爵様、子爵様、娘が失礼いたしました」

後ろからそそくさと母がやってきて深く頭を下げる。

マルガレーテも急いでそれに倣った。母の口にした、伯爵と子爵という言葉に頭を殴られた。なぜあんな子供じみたまねをしてしまったのだろう。身分を気にしない伯爵と優しい子爵に甘えてしまったのだ。

「いえ。どうぞ顔をおあげください。私は気にしておりません」

空気は柔らかいままだった。その言葉の通り子爵は笑いを含んだ声でマルガレーテに呼びかけた。

そろりと子爵を見上げる。及び腰のまま、申し訳ございません、と繰り返せば、子爵はにこやかに首を振った。

「本当にいいのです。最近気の滅入ることが多かったから、何だか気がぬけました」

ははは、と子爵はまた笑った。今まででも十分に明るい笑顔だと思っていたのだが、僅かに身を屈ませ、顔をくしゃりとして声を立てる子爵はずっと自然で楽しげだった。少しだけ子爵の本当の姿を垣間見れた気がした。

「ふむ、確かに近頃は物騒で休む暇もないからな」

やはり寄って良かったなと言って、伯爵が母に礼を言う。

「いえ。お二方に少しでもおやすらぎいただけたなら嬉しい限りです」

母はもう一度頭を下げると後ろに下がった。マルガレーテもぺこり、とやって下がろうとしたが、伯爵が引き止めた。

「マルガレーテ、お茶でも一緒にどうだ？」

「いえ、でも……」

伯爵と子爵は気にせずとも、失礼をしたあとで席をともにするのは気がひけた。そもそも先ほどの一件があらうとなかろうと、普通一般人が貴族とお茶をするなどありえないのだ。子爵はどうやら伯爵と同じように身分や立場を気にするような人ではなさそうだが、それでも躊躇してしまう。マルガレーテはつと視線を伯爵ではなく子爵に向けた。身分の問題がなくとも、初対面の人間が話に加わる

のでは子爵も気が休まらないのではあるまいか。

「ふうん。遠慮しなくていいんだぞ。シャルアと仲良くなりたいたいんだろ」

伯爵の意地の悪い言葉にマルガレーテはぱっと頬を染めてめくじらを立てた。そんなことはないと言おうとしたはずが、唇が震えて上手く言葉を紡げない。何故こんな反応をしてしまうのだろうか。ひどく動揺してしまい、そんな自分に驚き、顔を俯けた。けれど、頬の熱は引かなかった。伯爵の面白がるような視線が痛かった。

「まあ、とにかくどうだ、座りなさい」

隣の机から椅子を一つ引き出してマルガレーテに勧める。

どうしよう。立ち尽くしたマルガレーテに子爵が言った。

「私もあなたとお話がしてみたい」

マルガレーテは目を見開いた。いいのだろうか。子爵を窺い見ながら、マルガレーテはそろそろと椅子に腰を下ろした。

「そうか、シャルアの言うことは聞くんだな」

伯爵のあからさまな冷やかしにも、眉根をぴくりとさせることくらいしかできない。全くもって伯爵の言うとおりであった。

「大人しいなあ、マルガレーテ」

「伯爵、からかうのはやめたらどうです。彼女も困っている」

「ふふ、果たして困っているだけかな？」

マルガレーテはのぞき込んでくる伯爵をひたすら視界の外に追い出すことに尽力した。

「伯爵」

子爵が咎めるように伯爵を呼ぶ。伯爵は分かったよ、と言って乗り出していた身体を席に戻した。

「アンナ、マルガレーテにもお茶を」

伯爵が奥に控えていた母に声をかける。マルガレーテは立ち上がろうとしたが、母は軽くお辞儀をするとすぐに台所に立った。

「やってくれるそうだ。ほら、座りなさい」

「はい」

多少の居心地の悪さを感じながら座り直す。母はどう思っているだろうか。後で怒られるかもしれない。そう考えると更にそわそわと落ち着かなかった。

「お茶、美味しく頂いています」

「え？」

突然子爵に話しかけられ、マルガレーテはまだ母の背を眺めていたのを慌てて子爵に移した。

「このお茶美味しいですね。なんと言うのですか」

今度は言い直さしてしまった。少し青ざめながらミントとレモンガラスのフレッシュティーにレモンを絞ったものです、と答えると子爵はなるほど、と頷いた。やはり、マルガレーテの不敬をとがめるつもりはないようだった。

「色々な飲み方があるんですね。紅茶は好きですが、ハーブティーはあまりのまないのです」

「そうでしたか。でも、お気に召したのなら幸いです」
ほっと肩をなでおろす。気に入ってもらえた。嬉しくて頬を緩める。

「確かにうまい。けれど、いつもより酸っぱいな。思い切り絞っただろう」

伯爵がハーブティーを一口飲み、ペろりと舌を出す。

「酸っぱい」

「あ……、ごめんなさい。」

マルガレーテは握りつぶさんとする勢いでレモンを絞ったことを思い出した。

「あの、子爵様は大丈夫でしたか？」

訊ねれば、子爵は一口茶を含んで首を横に振った。

「美味しいですよ」

「ふん、庇ったな」

「伯爵？」

伯爵はシャルアからカップを奪い取り、腰を浮かして片腕を机に

突っ張ったまま茶を舐めた。

「……………」

伯爵はカップから口を離して訝しげな顔をする。そして、カップを見つめたままゆっくりと腰をおろした。

「やってくれたな、マルガレーテ。子爵様の茶はご無事だ」

恨みがましい言い方にマルガレーテと子爵は顔を見合わせた。

「大方私のに思い切り絞ったせいで子爵のときはもうほとんど残ってなかったんだろう」

カチャンと音を立てて伯爵はカップを戻す。

「そんなに悪いことをしたか？ 私だってシャルアと同じくらい疲れているんだぞ。いや、だから気が立っていたかもしれないが……」

マルガレーテは伯爵が疲れているというのも、気が立っているというのにも全く気がつかなかった。伯爵は感情を隠すのがうますぎるのだ。けれど、言われてみれば伯爵があそこまで苛立ちを露わにしたのは初めて見たかもしれない。申し訳ないことをした、と気が咎めた。

「お茶、入れ直します」

「いいよ」

立ち上がろうとしたマルガレーテを伯爵は制止した。

「うまいと言ったろう。ただ、そうだな、砂糖でももらおうか」

マルガレーテは胸にじんわりと温かいものが広がるのを感じた。

視界の端でシャルアも微笑んでいる。やはり自分は伯爵のことが好きだ、と思った。

「失礼いたします」

頃合いを見計らって母がお茶を持ってきてくれた。カップとティースプーンを置き、続けて角砂糖の入った瓶をマルガレーテの目の前に置いた。

「ありがとうございます、お母さん」

言えば母は、いいえ、と答えてにこりとした。そのまま盆を抱えてすぐに下がる。ちゃんと話を聞いていたのだろう。母はすごい。

「伯爵様、お砂糖はいくつ入れますか？」

砂糖瓶を手にとってカラカラとふたを回す。中に入っている小さなトングで角砂糖をひとつ摘んだ。

「では二つお願いしようか」

「はい」

カップに角砂糖を二つ落とす。薄黄色の茶がじわりと砂糖に染みていく。ティースプーンを渡すと、伯爵はカラカラと茶をかき混ぜた。

トングを戻して蓋を閉め、リシスの隣に瓶を置く。

うまい、と早くも茶を飲んだ伯爵が独りごちた。

「はあ。……本当にここ最近は忙しいからな。たまにはこうして休まないとやっていけない」

「ええ、本当に」

シャルアが神妙な顔で頷く。

「色々良くないことばかり起きる」

「ああ。だが実際に後始末をやらされる私達には全く何の説明もなしだ」

「言えない事情もあるのでしょう」

「それもそうだが、全く、やつら私達にばかり汚れ役を任せて。自分達は高みの見物ときた。許せない」

「それは……仕方がないでしょう」

「仕方がない、か。私はあれの存在自体が許せない。シャルア、お前もそのはずだろう」

伯爵は拳をぐっと握り締める。随分と立腹しているようだが、あれだのやつらだの具体的な名前が出てこずマルガレーテには話が全くつかめない。

「伯爵、この話はもう」

シャルアがきょとんとしたマルガレーテの方を横目でちらりと窺った。

聞いてはいけない話なのだろうか。席を立とうか迷っていると、

伯爵が憎しみのこもった声で呟いた。

「ヴィルのやつらも鋼もさっさとまとめて始末してしまえばいいんだ」

マルガレーテは自分の耳を疑った。ヴィルというのは、ヴィルヘルムに住む人々の蔑称だ。伯爵と子爵はあの処刑に関わっていたのか……。白昼夢のように処刑の様子がまざまざ蘇り、全身に悪寒が走った。

「伯爵！」

シャルアが今までになく鋭い声で伯爵を諫めた。

「何だシャルア、やかましい。大丈夫だよ、マルガレーテにもアナにも話は分らない」

「それだけではありません。ウィルキンスさん、大丈夫ですか？」突然目の前に金色の髪が揺れた。

「え？」

「顔色が良くない」

水色の瞳が心配そうに細められる。

すぐ近くにシャルアの顔があることを漸く理解してマルガレーテはさっと体を引いた。

「い、いえ大丈夫です」

「本当に顔が蒼いな。マルガレーテ、まさか処刑を見に行ったのか？」

勘の良い伯爵に尋ねられ、マルガレーテはこくりと頷いた。僅かに息が苦しかった。

「ああ、くそ。あんなもの見に行くものではないのに」

「とにかく、今日は休まれた方がいい。申し訳ないことをしました」そう言うとシャルアはすぐに立ち上がった。

「伯爵、もう失礼しましょう」

伯爵は額に手を当てて、そうだな、と頷いた。

母が扉を開け二人が出て行く。シャルアは部屋を出る際にマルガレーテに水色の瞳を向けた。続いて視線がリシスにずらされたよう

な気がしたが、それは気のせいかもしれない。

脚に力が入らず、見送ることもできない。また、子爵に会えるだろうか。ほろ甘い思いで子爵が扉の向こうに去るのを見つめた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7168w/>

無幻灯

2011年10月21日11時58分発行